

伊藤五郎左衛門(祐利)  
いとごろうざえもん  
.....1777 =

地域の庄屋らと、全財産を投じて空前の規模の分水工事、低湿地を大穀倉地帯に変えた。

越後国蒲原郡山崎村で、庄屋伊藤又四郎の三男に生まれる。

幼時に、本家の同郡高山村の庄屋伊藤五郎左衛門(将房)の養子となり、

田沼意次失脚1786 = 9歳 :

異学の禁・・・1790 = 13歳 : 養父が中野小屋組の割元役に栄進し、養父母とともに、中野小屋に転居。

カヌー来日・・・1792 = 15歳 : \*元服して、養父の割元膝代役を命じられると、かねて、低湿地で悪水のはけ口が無く、大雨のたびに大被害となっていた三潟地方の改善を図ろうと、堀割工事の基礎的研究を始め、

松平定信引退1793 = 16歳 :  
写案・・・1795 = 18歳 :

宣長没・・・1801 = 24歳 : 同郡首根村の割元の長女と結婚後、

バザール来航・・・1804 = 27歳 :

青洲麻醉手術1805 = 28歳 :

バザール報復・・・1806 = 29歳 :

間宮海峡発見1808 = 31歳 :

浮世風呂・・・1809 = 32歳 :

高田屋拿捕・・・1812 = 35歳 :

浮世床・・・1813 = 36歳 :

黒住教・・・1814 = 37歳 :

伊能測量終・・・1816 = 39歳 :

杉田玄白没・・・1817 = 40歳 :

水野忠成老中1818 = 41歳 :

.....1820 = 43歳 :

膝栗毛終・・・1822 = 45歳 :

シブツ鳴滝塾1824 = 47歳 :

日本外史・・・1827 = 50歳 :

シブツ事件・・・1828 = 51歳 :

富嶽三十六景1831 = 54歳 :

蛮社の獄・・・1839 = 62歳 :

内野村境の海岸砂丘を堀割り、悪水を大潟から五十嵐浜へ放流する計画の測量を終え、  
\*前年に中風を患った養父がお役御免となり、跡目を相続するとともに、藩主から三潟周辺の村々を支配する浦潟新田懸を命じられ、放流計画を実施運動へと展開、  
諱を祐利と改め、多忙な公務のなか、前年来大水害の三潟を巡回して、農民生活の実態把握に努めるとともに、苦境から離郷する農民を呼び戻し荒地を与えて開墾させて成績を上げ、  
藩主から褒美金200疋を与えられる。  
この間、2男1女をもうけ、  
養父の通称を襲名し、以後、五郎左衛門祐利と名乗る。2人の先輩割元を訪ねて説得し、連名で藩に、「三潟緑古田悪水抜堀割工事願」を提出するも、とても無理と即座に却下されたため、さらに多くの庄屋を訪ねて、説得して回り、  
17人の連印を得、一人で必要な多くの書類を作成して、さらに直前に1人参加を得て、再提出するが、他領とも関わるとして再び却下されたため、天領・村上領諸村を回って庄屋を説得、天領側は気乗り薄だったが、村上領15村が喜んで参加、  
2回の合同会議を全て主導し、諸問題を協議決定、長岡側は自普請とし、村上側は藩が全額出費することになって、以後、何の支障もなく進展、満場一致で筆頭願人に選ばれ、  
長岡藩主の副申書を添えて正式に幕府に提出したが、  
翌春になっても沙汰無く、新潟港の反対のためと推察、藩から説得してもらい、幕府から派遣された役人が実地検分、ついに、幕府から長岡藩江戸留守居役に許可通達、登城して藩主から正式に伝えられ、融資を願い出るも認められず、代わりに新田草地を賜り、庄屋連は私欲を捨てて邁進することを誓いあう。  
着工、長岡・村上別会計で、それぞれ庄屋らが工事を運営、藩士も常勤して監督して進めるも、難工事で予想外の出費となり、金策に奔走する一方、前代未聞の大工事に、内野村が一躍有名になり、各地から見物客が集まって繁栄を享受し、賑やかな郷町に変貌、  
延べ200万人弱の人員、総額6万余両をかけて、新川通水が完成、悪水はまたたく間に海へ流れ出し、両藩主それぞれが庄屋連を表彰。以後、藩では、三潟開拓を奨励。資金調達のため、割元役録を買入したことなどから、割元役を退き居宅を新築して移住するが、村民の尊敬が新割元を凌ぐため、長居はできないと、  
同郡東汰上村の庄屋役録を買って移住、  
中野小屋村に亡父の七回忌供養塔を建立。240町歩近い美田になり、検地して配分し、新たに10村が誕生するが、幕府も関心を示して役人が調査、  
三潟開拓地全てを幕府に献上しよう命じられ、落胆した庄屋連が懇願書を提出するも叶わず、哀れんだ藩主が残された負債を実力に応じて分割返済するようにして、借金問題は解決。さらに、願人の功績に対し、それぞれ子孫にわたって御蔵米70俵の下付することになった。

以後、法華経行者として蓮久寺に参じ、唱題と拝読に明け暮れる晩年を過ごし、  
没した。